

新入園児を

集団生活に適應させる指導



石井達子

毎年一月頃になると、そろそろ新入園児の事が話題になるのは、どちらの職員室でも同じことだろうと思います。私共もその例にもれず、やがて卒園を迎える在園児に対する一種のさびしさの中にも、何がなし、いそいそとした気持ちで、新入園児のための準備をしたり、話し合いに心はずませる時があったりします。そんな待ちどおしいような気持ちを何日かやり過ごしていよいよ四月。はち切れるような生命の息吹きをふりまきながら馳ける子ども達の後を追いかける時、私達は教師としての醍醐味を味うのではないのでしょうか。事務室で事務をとる人の、研究室で研究を重ねる人の、それぞれ喜びはありましょう、しかしこのように年ごとに、新しい生命の芽吹きに接し、それをはぐくみながら自分自身の新しい生活を築きあげていく私達の仕事の意義と幸福を四月になると痛感します。

四月の子どもの姿

このようにして迎えた子ども達の四月の状態はどうでありましょうか。四、五年も前でありましたら、入園式にも母親と離れられず

泣いていた子が クラスに三、四人はありました。しかしこの頃では、一般に「幼児の生活」というものが重要視されてきた故か、体力もあり、社会性も身につけている子どもが多く、ものおじしないで園生活になれていきます。反面ほうられすぎて、おとなの実生活をそのまま受けいれ、現実的な観念で「社会すれ」した子どもが多くなっているのではないかと心配なこともあります。

ともあれ、どの子ども始めて家庭をはなれ、親の保護から脱けて社会生活（幼稚園生活）を始めるのですから、幾分の不安、緊張はまぬがれないでしょう。

つぶらな瞳を期待と不安とに輝やかせながら、母親に手をつながれて門をくぐる子ども達、それぞれの家庭教育にいろどられた個々の子ども達が一つの組という社会のわくにはいった時、一人ひとりが先生という中心に結びつき、先生を通して、友達と結びついているのではないのでしょうか。

「かごめかごめ」を繰り返す輪も、何かの拍子に切れてしまえ

ば、そのままになってしまつて自分からまだつなげない手、「ガッタン、ゴー」と走っていた汽車から、おろされると、また汽車がくるまで待つていられず、庭の隅にボツンとたたずむ子など、まだまだその結びつきは弱いようです。ここで表題にもどつて見ましよう。このような中で、「集団生活に適應していない子どもの状態」とはどんな状態なのでしょう。

- ・親からはなれられずにいる子ども
- ・遊びの仲間にはいらぬ子ども

・集つて何かを始めようとする、皆の真ん中でできて、ひっくり返つたり、ふざけたりする子ども

- ・オルガンの陰や机の下にかくれて出てこれぬ子ども

- ・何でも反対する子ども

- ・先生の話をだまつきいていられぬ子ども などでしょうか。

その原因は何でしょうか。

- ・ひとりっ子、末子、男子だから、などの理由で家庭で甘やかされ、過保護であつたこと

- ・家族構成によつて、抑圧をうけていること

- ・友達あそびの、遊び方を知らないこと

- ・身体的な劣性

以上のような種々雑多な個々の子どもの集団であるという状態を頭におき、併せて四月のねらいを考えながら表題「新入園児を集団生活に適應させる指導」という事を考える時、私達は次のような三

つの面を平行してすすめていかねはならないのではないのでしょうか。

- 一、園全体として新入園児をどう迎えるか。

- 二、各クラスが三〇人〜四〇人の集団をどのようにしてまとめていくか。

- 三、個々の子どもの適應性をどのように正しくのばしていくか。

そこで以上三つの立脚点から指導事例を記したいと思います。

指導事例(1) 〆園全体として

さて、受け入れの構えはできているでしょうか。

- ・園長先生はじめ、園内のすべての先生、用務員のおばさんに至るまで、和やかなチームワークのとれた中で新入園児を迎えようとする新鮮な人的環境。

- ・子ども達が自然にいろいろの意欲をそそられるような適度の物的環境。

- ・始めての社会生活をするにあたって、最小限、自分と他との区別ができ、自分のことが自分で処理できるような準備、など家庭と学校との中間的存在(内容は独自のものだが)として両方から良い要素をとり入れて、準備を進めていきたいと思います。そして一日入園などの方法により、少しでも園のふんいきになれて安心して登園できるようにしておられる園もありましよう。また保護者に幼稚園という所についての理解を深めるための指導(話により、本、プリントにより)をしておられる園もありましよう。

△組全体として▽

安心して園生活ができるように

1. 入園前に、一日入園や、父母会を開いて親子とも、園生活を知っておく。

2. 家庭で「そんな事をする」と幼稚園にいられない」とか「先生にいう」など恐がるようなことをいわないように連絡する。

先生や友達の名前を覚える。

たのしんで友達と遊べるように

1. 「かごめ かごめ」などのように歌を歌いながら簡単な動作で大勢が遊べるものなど毎日くり返していると次第に人数が増していきます。

2. 砂山などではなるべく円周の長い大きな山を作って大勢でかためたり、トンネルを掘った時「ほらYちゃんの手とAちゃんの手がつながった」とさわらせてやったりします

3. 先生や友達といっしょに飼育物に餌をやったり、みながら話したりすると、同じ行動を通して親しみを覚え、友達になります。

皆が知っている歌を友達と手をつないだり拍手しながらいっしょにうたったり、話をきいたりします

指導事例(2) △個々の子どもの問題▽

S・Hの場合 男児 ひとりっ子

家族構成 父母と三大家族、父の職業 公務員

入園式の間、何度も母親の方を振り返っていたSが、式後他の子ども

も達といっしょに自分の保育室に向って歩きだしたとたん、「ワッ」と大声で泣き始めました。「お母ちゃんがいなくなっちゃったよ」と言いながら母親達の間に入れ入ろうとすると「ここよこよ 馬鹿だね」と母親が出てきて、だきしめていました。それからというもの、毎日母親から離れようとしなくなり、保育室の中で母親に本をよんでもらったり、積木をしたりしていました。私以外の子ども達と遊びながら、Sよりも母親を観望しました。自分の子ども以外は目にはいらない」というようすで「Sや Sや」と干渉していました。

原因 「これは母親に原因があるな」と思い四日目の帰り際にこう申しました。

教「明日は一応無理に離してみますが、玄関の所で待っていて下さい。時々見にいきますから必ず定った場所において動かずにお願います。それから心配して、保育室の方にのぞきに來ないでください。」母「そうですか？ でも」とあまり信用しないようすでしたので、翌朝案の定泣き叫ぶのをしっかり抱きしめながら、背中をさすり、母親に昨日の約束を話させましたが「お母ちゃんはどうぞきだからだめだ」といいます。「絶対にうそはつかないわ、先生もいっしょに約束したんだから」というと母親がいました。「今から一、二年前にこんなことがありました。Sが『遊びにいってくるから、どこも行っちゃ嫌だよ』といって出ていきました。Sが帰ってくるま

でに戻るつもりで、ちょっと私がつかいに立た後に帰って来て、家の中に誰もいず、たいへん恐がり、それからちっとも離れなくなり「ました」と。そこでもう一度「絶対に」と約束して、時々母親の顔を見にいかせました

家庭訪問 一週間位たった時「家庭内で遊ぶようすはどうだろう」と思い訪問して見ました。そこにも問題がありました。すべてSの思い通りに動いている生活、従属的な母親、大きな二輪車を家の中で、畳の上でのりまわしているのです。

母「家じゃ、お父さんも私もこの子のために生きていようなものです」

教「もう四才では相当の弁別力もあるのですから、家の中で遊ぶ遊びと外で遊ぶ遊びとをわからせ、自転車などは庭に出した方がよいのではないかしら、すべて子ども本位にしてしまつては、何もかも一しょになつてしまつて、子どもにとつて、抵抗も疑問もなく、これでは正常に発達しないでしょう、あまり急に「いけません」が多くなつてはかえつて悪いでしょうから一つずつなおすつもりで、気長にしてみてください。」

友だち作り 母親とはやつとはなれたが友達と遊ぼうとしない、見ている時に批判めいたことをいう、こんな場合友達遊びの中にはいるか、友達をこちらに近づけるか、Sの場合は後をとりました。しっかりと私の衣服をつかまえて離さないで、それを利用して汽車ごっこになり走りました。「どなたかお乗りください」といいなが

ら、積極的によく遊ぶH・Nの所へいくと、早速Sの後についてくれました。もともと友だちが欲しくて仕方がないので、自分の後になつたH・Nを大尊敬して、喜びましたので、ならば順序を代えては遊びました。

ひん尿と暗い所をいやがる 庭の遊びが一応終つて集つて何かしようとする、手洗いにいきたがりました。また曇天でうす暗くなつたり、幻燈などのため部屋を暗くしたりすると、嫌がつてどこかへいつてしまします。テレビは大嫌いという珍しい子でした。

役割や仕事で認められる 「先生へたでしよう？」と持つてくる子でした。花びんの水を取りかえたり、足りないものを持つてくる手伝いをさせたりして、他の友だちに認めさせ、だんだんと自信がでてきました。

こうしてSは集団生活の中に溶けこんでいきました

△適応と個性と▽

しかしここで私はいつも思うのです。適応は同一化でないという事を。そんなことは当たり前と思ひながらも、自分自身「適応適応」と思つていると、アパートのように四角四面で、合理性ばかりが先に立つたつまらない人間が多くできてしまわなかつと心配です。屋根が円いのか、三角や、赤いのか青いのやいろいろな家があるように、それぞれの個性の良い面をのびながら、しかもどんな集団にはいつても仲良くやつていける子ども達にしてやりたいと思ふのは欲張りすぎるでしょうか。

(文京第一幼稚園)